

子離れができない親とはどんな親か

—「今後の生活に関するアンケート」1995年版を用いた定量分析—

比較教育社会学コース 渋谷 知美

Attributes, Opinion and Family of the Parents who are Over-attached to their Children:
The Analysis of Quantitative Data in 1995

Tomomi SHIBUYA

The first purpose of this paper is to present the model of the parents who are over-attached to their children (they are called parents who cannot KOBANARE in Japanese) through the analysis of their attributes, the opinions on relationship between children and parents, gender division of labor and life style, and the family environment including the number and age of children and relationship between mother and father. The second purpose is to clarify the relations between each variable. The data employed in this study is quantitative data surveyed with random sampling in 1995.

To sum up the major characteristics of the parents who are over-attached to their children are having lower income, younger children, positive prospect for the education of the children, being younger, enthusiastic about education, conservative about the gender division of labor.

The variables which have independent influence is their attributes, the opinions regarding relationship between parents and children, and gender division of labor.

目次

1. はじめに
 - A. 課題の設定
 - B. 先行研究の検討
 1. ジャンル1：本人属性にかんする先行研究
 2. ジャンル2-1：意識(親子関係)にかんする先行研究
 3. ジャンル2-2：意識(性別役割分業)にかんする先行研究
 4. ジャンル2-3：意識(人生全般)にかんする先行研究
 5. ジャンル3：家庭環境にかんする先行研究
2. 仮説の設定およびデータと変数
 - A. 作業仮説の設定
 1. ジャンル1：本人属性にかんする仮説
 2. ジャンル2-1：意識(親子関係)にかんする仮説
 3. ジャンル2-2：意識(性別役割分業)にかんする仮説
 4. ジャンル2-3：意識(人生全般)にかんする仮説
 5. ジャンル3：家庭環境にかんする仮説
 - B. 分析に用いるデータと変数
3. 子離れと親の属性・意識・家庭環境についてのクロス表分析
 - A. ジャンル1：本人属性における格差
 - B. ジャンル2-1：意識(親子関係)における格差
 - C. ジャンル2-2：意識(性別役割分業)における格差
 - D. ジャンル2-3：意識(人生全般)における格差
 - E. ジャンル3：家庭環境における格差
4. 非子離れ者に影響力のある変数
 - A. もっとも影響力のある変数
 - B. 各変数間の影響関係
5. まとめ

1. はじめに

A. 課題の設定

近年、子離れができない親が増えていると言われていた。雑誌『児童心理』2003年5月号は「子離れできる親・できない親」をテーマに特集を組み、社会学の分野でも「子離れ」をテーマに研究が始まっている(鈴木2001)。2000年の流行語にもなった「パラサイト・シングル」現象のクローズアップは、同時に、学校を卒業した子どものパラサイトを許す親、すなわち「子離れ」できない親が数多く存在することを明らかにした(宮本・岩上・山田1997)。

いったい、子離れできない親とはどんな親なのだろうか。

近年、親世代のライフスパンが延び、子の教育期間が長引くにつれて、親子が親子として関係性を持つ期間が長くなった¹⁾。また、若年層の就業の流動化は、「パラサイト・シングル」をますます増やすだろう。このことは、「子離れ」できない親が増加するであろうことを意味する。こうした中であって、「子離れできない親」といささか非難めいたニュアンスを込めて語られる存在がどのような属性・意識を持ち、いかなる家庭環境に置かれた人物であるかを明らかにするのは、意味のあることだと思われる。

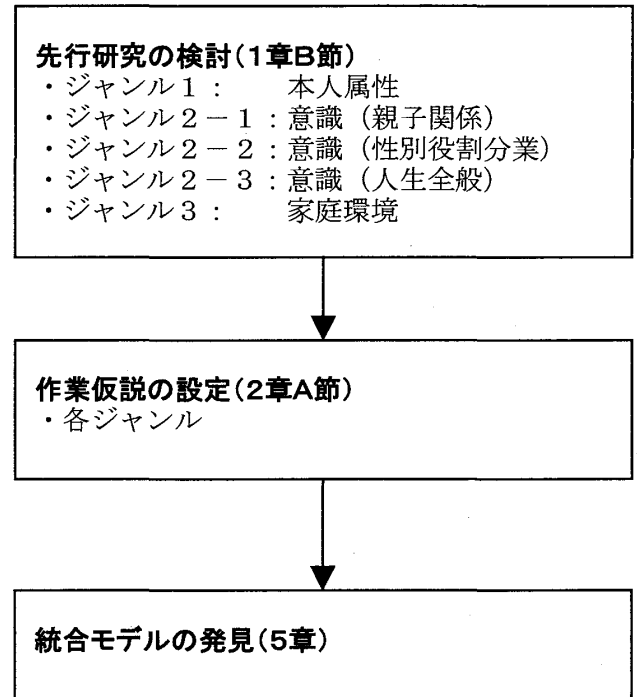
ところが、子離れできない親の属性、意識、家庭環境の各要素を個々別々に明らかにする先行研究は存在するものの、この三要素を同一対象で分析するものは存在しない。三要素をトータルに明らかにするには大規模な定量分析が適していると思われるが、心理学ではケーススタディが多く、社会学的な定量分析でも前述の鈴木や宮本らによる調査は比較的限定的な標本を対象としている²⁾。

したがって本稿では、子離れできない親の属性、意識、家庭環境のトータルな像を、大規模な量的調査(「今後の生活に関するアンケート」1995年版。以下本調査と称する)のデータの分析によって提出することを課題とする。加えて、各変数間の影響関係も明らかにする。本稿の分析枠組みを図式化すれば図1のようになる。

B. 先行研究の検討

先行研究では、「子離れできない親」はおおよそ以下のような属性、意識(親子関係/性別役割分業観/人生全般にかんするもの)を持ち、家庭環境にあることを

図1 分析枠組み



明らかにしてきた。

1. ジャンル1：本人属性にかんする先行研究

一般に子育てに専念している専業主婦ほど育児に自分のアイデンティティを預けやすいということが言われている。「子どもの出世」を願う親は専業主婦に多いという研究もある(目黒2000)。己れのアイデンティティを賭けて子どもの出世を願う親とは、子どもとの距離がとれていない点で「子離れ」できない親と言ってよいと思われる。

世帯年収については、親の年収が高いほど経済的自立をしていないと答える女性(=娘)が多いという知見を引き出している(宮本ら1997:64)。ここから、世帯年収が高いほど子離れできていない親が多いことが予想できる。

2. ジャンル2-1：意識(親子関係)にかんする先行研究

心理学研究では、「子離れ」のできない親には、親が抱く子どもの理想像に近づけたい、あるいは子を意のままに動かしたい、という欲望のもとでの「支配的介入」行為が見られることが指摘されている。それは、子どもの進路に口を出す、子どもが不登校をすると、本人には無理だからと親が学校とのすべての交渉を肩代わりする、などの行為となってあらわれる(鎌田2002:1518)。

3. ジャンル2-2：意識(性別役割分業)にかんする先行研究

「子離れ」と性別役割分業意識との関係については、鈴木(2001:49)が念入りな考察をしている。すなわち、子離れのできない母親(「子離れ否認ケース」)には、「産育は女の使命」といった、母親を資質的役割として捉える傾向が見られるという。このような母親は、「ジャンル1」で触れたような、子育てに己のアイデンティティを預けてしまう親の像とぴったり重なる。

4. ジャンル2-3:意識(人生全般)にかんする先行研究

春日井(1997:153)は「中期母娘関係ではお互いに与え手であり受け手であるという意識『互酬性の認知』を強く抱く」という知見を提出している。「互酬性」とは、母娘がサービスや贈り物や感情の与えあいを通じて関係を深めてゆく状態のことである。ここからは、頼りにすることと頼りにされることは両立可能であることが見えてくる。それは「頼りたいと思っている人が頼られたいとも思っている」ケースがありうるということであり、さらに言えば、将来の子からの贈与を期待して予め子に贈与する親も存在しうるということである。

子離れできない状態とは、ネガティブな側面を捉えれば「子への執着」となるが、ポジティブに捉えれば「子への贈与」となる。子離れできない親には、将来の子からの贈与を期待している者が存在しないだろうか。

5. ジャンル3:家庭環境にかんする先行研究

ここでは子どもの年齢や人数、夫婦間の家事分担の度合いや夫婦間の関係を「家庭環境」と呼ぶ。子どもの年齢や人数との関連で「子離れ」現象を明らかにした先行研究は見あたらなかった。

家事分担については、男女共同参画推進のレトリックで「夫婦間で家事分担ができて国ほど子どもが多い」という言説が見られる。もちろん、子どもをより多く産むことと、その子どもから離れられないこととは別の問題である。しかし、家事負担が少ない者ほど心の余裕ができ、「子どもにはいつまでも頼りたい」と思う者が多くなるのではないか。家事負担が軽いことは子離れをできにくくする前提条件だと考えられる。

夫婦関係については、主に心理学的の分野におけるケーススタディで、「夫婦関係がよくない母親ほど子どもに入れこみ、子離れができない」ことが言われてきた。夫婦関係で満たされないぶん、エネルギーを子どもに投入する母親のイメージは、ほとんどカリカチュアライズされて流通している。

以上のように各先行研究は断片的に子離れできない

親の像を描きだしている。しかし、同一対象で各要素についてトータルに検討した先行研究は無く、そうであるがために、各要素間の関係性は明らかになっていない。

2. 仮説の設定およびデータと変数

A. 作業仮説の設定

以上の先行研究の検討から各ジャンルについて次のような作業仮説や検討すべき事項を導きだした。

1. ジャンル1:本人属性にかんする仮説

「子どもの出世」を強く願うのは専業主婦が多いという先行研究の知見から、自分のアイデンティティをかける対象、つまり子どもを手ばなすことは専業主婦ほど厭うことが予想される。そこで、「専業主婦>パートタイマー>フルタイマーの順に子離れできていない者が多い」という仮説をたてる(仮説1-1)。

また、親の年収が高いほど経済的自立をしていない娘が多いという知見(宮本ら1997:64)からは、「世帯年収が高い親ほど子離れができていない」という作業仮説を引き出すことができるだろう(仮説1-2)。

2. ジャンル2-1:意識(親子関係)にかんする仮説

子離れのできていない親は干渉的であるという知見(鎌田2002:1518)からは、「子どもに干渉したいと思う人ほど子離れができていない」という仮説が導きだせる(仮説2-1)。本調査では干渉の度合いを「子どもはのびのび育て、あまり干渉したくない」と思うかどうかを指標として、子離れとの関連を探る。

3. ジャンル2-2:意識(性別役割分業)にかんする仮説

子離れのできない母親ほど「産育は女の使命」と考えているという先行研究(鈴木2001:49)からは「性別役割分業観にコミットする者ほど離れ者ができていない」という仮説がたてられる。「夫も家事を分担すべきである」「結婚したら、女性は家庭を守ることに専念するほうがよい」「結婚したら、妻が夫の名を名乗るのは当然のことだ」といった主張への賛意の度合いを性別役割分業観へのコミットの度合いの指標とする。

4. ジャンル2-3:意識(人生全般)にかんする仮説

1章2節5項で、子離れできない親には、将来の子からの贈与を期待している者が存在する可能性を示唆した。そこで、「老後は子どもに頼りたいと考えている者ほど、子離れができていない」という仮説を設定

する(2-3-1)。

ここから展開して、「将来の経済的見通しを悲観している者ほど、子どもに執着する(=子離れができない)」という仮説もたてる(仮説2-3-2)。歴史をさかのぼれば、子どもはもともと老後の「備え」であり「財」であった。自らの老後の備えとして子どもを優秀に育てようとするあまり、老後の経済的見通しが悲観的な者ほど、子離れができなくなっているのではないだろうか。

5. ジャンル3：家庭環境にかんする仮説

幼い子どものかわいらしさから「いつまでも頼ってほしい」と願う親が多いであろうことは、経験的に予想できることである。そこで、「子どもの年齢が低いほど子離れできていない者が多い」という仮説を設定し、子どもの年齢との関連を見る(仮説3-1)。

家事負担が軽いことは子離れをできにくくする前提条件ではないか、という予想は先述のとおりである。そこで、「家事が分担できている親ほど子離れができない」という仮説をたてる(仮説3-2)。

また、心理学のケーススタディでよく言われている「夫婦関係がよくない母親ほど子どもに入れこみ、子離れができない」というテーゼを確認するために、「配偶者とはよく会話をしている」という質問への回答を「夫婦のコミュニケーションの良し悪し」を示す指標として用い、子離れとの関連性を探る(仮説3-3)。

B. 分析に用いるデータと変数

データには東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センターのSSJデータ・アーカイブを通じて入手した「今後の生活に関するアンケート」(1995年版。以下、本調査と表す)を用いる。

本調査は全国から無作為抽出した18歳から60代までの男女約2,000人にたいし、趣味、親子関係、夫婦関係、今後の生活の見通しなどの多岐に渡る分野の意識や現状についてたずねた大規模な調査である(標本特性は表1)。本稿では、そのうち、本人属性、親子関係にかんする意識、性別役割分業にかんする意識、家庭環境にまつわる設問をピックアップし、考察する。

大規模無作為調査であること、属性、意識、家庭環境にまつわる設問が豊富であることから、子離れできない親の三要素についての統合モデルを組み立てるのに、本データはきわめて適合的だと考えられる。

分析に用いる変数と仮説について説明する。

まず、子離れができている／できていない指標として「子どもにはいつまでも頼ってほしいと思っていま

表1 標本特性

		度数	%
性別	男性	1130	48
	女性	1222	52
年代	18～19歳	69	2.9
	20～29歳	352	15.0
	30～39歳	469	19.9
	40～49歳	606	25.8
	50～59歳	475	20.2
	60～69歳	381	16.2
世帯収入	200万円未満	78	4.3
	200万円～300万円未満	114	6.3
	300万円～400万円未満	195	10.8
	400万円～500万円未満	204	11.3
	500万円～600万円未満	209	11.6
	600万円～800万円未満	355	19.7
	800万円～1,000万円未満	263	14.6
	1,000万円～1,500万円未満	254	14.1
	1,500万円～2,000万円未満	83	4.6
2,000万円以上	44	2.4	
就業形態 (既婚女性のみ)	専業主婦	339	40.6
	パート	167	20.0
	フルタイム	330	39.5
子どもの有無	あり	1791	76.1
	なし	561	23.9
子どもの人数 (複数回答)	1人	316	17.7
	2人	992	55.4
	3人	422	23.6
	4人	48	2.7
	5人	7	0.4
	6人	4	0.2
子どもの年代	幼稚園・保育園前	126	7.1
	幼稚園・保育園	104	5.8
	小学生	254	14.2
	中学生	127	7.1
	高校生	161	9.0
	大学生・短大生・大学院生 (専門学校生・予備校生を含む)	137	7.7
	学校を卒業して働いていない (結婚した子も含む)	50	2.8
	学校を卒業して働いている (結婚した子も含む)	827	46.3

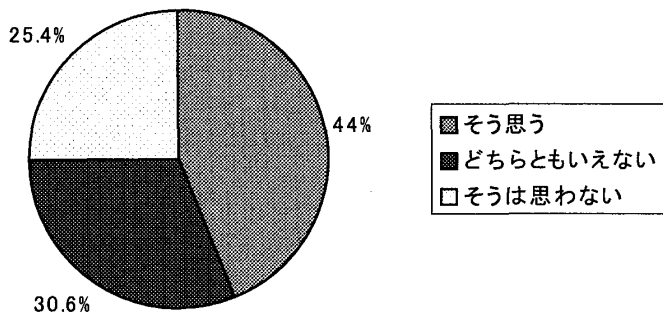
すか」という質問項目に対する回答を用いる。「そう思う」「ややそう思う」と回答した者を「非子離れ者」と呼ぶ。本稿でいう「子離れできていない親」とはこのグループのことである。いっぽうで、「そうは思わない」「あまりそうは思わない」と回答した者を「子離れ者」と呼ぶことにする。子離れができている親のことである。

この「非子離れ者」「子離れ者」を従属変数とし、独立変数を、本人属性、本人意識、家庭環境の三ジャンルにまつわる設問から選びだして、クロス分析をし各ジャンルごとの分析を行う(3章)。そののち、三ジャンルの各変数の関係をロジスティック回帰分析によって明らかにする(4章)。

3. 子離れと親の属性・意識・家庭環境についてのクロス分析

まずは、全体を概観しておく。子どものある人2,309人のうち、44%が「いつまでも子供には頼りたい」と答えている。約半数近くの人びとが「非子離れ者」であることになる(図2)。

図2 子どものある人のうち「子どもにはいつまでも頼りたい」と回答した者の割合(n=2309)



では、非子離れ者と子離れ者のパーセンテージの差のうち、有意差があるものは、どの変数で分類したさいに見られるのだろうか。表2は各変数にしたがってクロス表分析を行った結果である。各ジャンルについて検討してみる。

A. ジャンル1：本人属性における格差

χ^2 二乗検定でもっとも有意差が見られたのは、年齢である(0.1%水準で有意)。これは、一見、子どもの年齢が効いているためだと思われる。

性別がまったく有意でなかったのは興味ぶかい。一般に、女性のほうが子育てにコミットしており、したがって「子離れ」もしにくいというイメージがあるからである。本調査の結果は、そのイメージを否定するものである。

仮説1-1にもとづく女性のみを対象とした就労形態別の分析では、有意差は見られなかった。「専業主婦ほど非子離れ者が多い」という仮説は棄却される。しかしながら、年代別に分析してみると、20・30代だけは有意であった。パート女性は子離れをしているが、フルタイム女性、専業主婦は子離れしていない。パート女性は家事育児と低賃金労働の二重負担に疲れ、いやでも子離れをせざるをえない状況にあるのではないか。

仮説1-2にもとづく世帯年収別では、1%水準で有意と出た。意外なことに、世帯年収が上がるにつれ

子離れ者が多いという結果になっている。高所得者ほど子育てにはクールで、低所得者ほど子どもへの熱い思いを持っているという図が浮かびあがる。

B. ジャンル2-1：意識(親子関係)における格差

親子関係にかんする意識では、「進学にあたって塾は必要だと思う」「生活を切り詰めても子どもには教育を受けさせたい」「子どもに頼りにされている」が0.1%水準で有意であった。子離れができない状態とは、教育熱心な状態ともいえるわけで、それが学習のための財の提供の形となってあらわれたのが「塾」なのだろう。「生活を切り詰めても子どもには教育を受けさせたい」も同様に読みとくことができるだろう。

「子どもに頼りにされている」については、「いつまでも子どもに頼りたい」という意識が「頼りにされている」というリアリティを作りだしていると解釈するのが妥当だろう。

興味ぶかいのは、「子どもの教育の見通し」(1%水準で有意)である。子の教育にかんして楽観視している人ほど子離れができず、悲観している人ほど子どもから距離をとっている。

質問紙によれば、「子どもの教育の見通し」とは、「子どもの教育のための費用や施設の心配がない、子どもが非行に走らず、素直に育ってくれることなど」である。典型的なダブルバーレル質問であるが、あえて後半に注目すれば、この質問に「楽観」の立場を取る者の子どもは出来が良く、「悲観」の立場を取る者の子どもは出来が悪いということになる(あくまで、親の目から見て、である)。とするならば、よくいわれる「出来の悪い子ほど可愛い」は、ここでは否定される。「出来の悪い子は早く離れてほしい」というのが本調査の示すところである。

仮説2-1-1の「子どもはのびのび育てあまり干渉したくない」における非子離れ者と子離れ者の有意差は見られなかった。ただ、この設問は「干渉したくないか/干渉したいか」という本人の「意識」をたずねるものである。仮説2-1-1をたてるのに参照した鎌田仮説は客観的な「行動」について言及しているものであり、本調査の結果をもって鎌田仮説が否定できるわけではないことには留意が必要である。

C. 意識(性別役割分業)における格差

性別役割分業意識についてのみジェンダーを第三の変数にして三重クロス分析をした。性別役割分業意識である以上、男女での意識の違いが見られると考えた

表2 クロス分析結果

		頼られたい	頼られたくない
1 本人属性			
年齢***	20・30代	71.5	28.5
	40代	62.9	37.1
	50代	48.7	51.3
	60代	61.2	38.8
	性別	男性	61.3
	女性	61.3	38.7
就業形態(女性のみ)	共働きフルタイム	64.9	35.1
	共働き妻パート	56.5	43.5
	専業主婦(夫片働き)	63.1	36.9
就業形態(20・30代女性のみ)**	共働きフルタイム	75.5	24.5
	共働き妻パート	46.2	53.8
	専業主婦(夫片働き)	76.7	23.3
就業形態(40代女性のみ)	共働きフルタイム	63.0	37.0
	共働き妻パート	65.5	34.5
	専業主婦(夫片働き)	48.9	51.1
就業形態(50代女性のみ)	共働きフルタイム	52.2	47.8
	共働き妻パート	52.0	48.0
	専業主婦(夫片働き)	53.3	46.7
世帯年収**	600万円未満	66.4	33.6
	600万円以上1000万円未満	53.5	46.5
	1000万円以上	58.9	41.1
2-1 意識(親子関係)			
子どもはのびのび育て、あまり干渉したくない	そう思う	61.5	38.5
	そうは思わない	57.8	42.2
子どもの進路は子どもに任せるのがよい**	そう思う	62.2	37.8
	そうは思わない	44.4	55.6
子どもの教育の見通し**	楽観している	62.8	37.2
	悲観している	45.2	54.8
子どもとはよく会話をしたい	そう思う	61.8	38.2
	そうは思わない	44.4	55.6
進学にあたって、塾は必要だと思う***	そう思う	65.9	34.1
	そうは思わない	51.7	48.3
子どもの教育にたいする満足度	満足	61.7	38.3
	不満	55.1	44.9
生活を切り詰めてでも、子どもにはできるだけ高い教育を受けさせたい***	そう思う	64.5	35.4
	そうは思わない	49.5	50.5
子どもに頼りにされている***	あてはまる	66.4	33.6
	あてはまらない	34.6	65.4
2-2 意識(性別役割分業)			
夫も家事を分担すべきである(男性)	そう思う	61.8	38.2
	そう思う以外	54.8	45.2
夫も家事を分担すべきである(女性)	そう思う	60.5	39.5
	そう思う以外	63.2	36.8
結婚したら、女性は家庭を守ることに専念するほうがよい(男性)+	そう思う	64.5	35.5
	そう思う以外	58.1	41.9
結婚したら女性は家庭を守ることに専念するほうがよい(女性)***	そう思う	69.5	30.5
	そう思う以外	55.8	44.2

		頼られたい	頼られたくない
結婚したら、妻が夫の名を名乗るのは当然のことだ(男性)	そう思う	62.4	37.6
	そう思う以外	58.8	41.2
結婚したら、妻が夫の名を名乗るのは当然のことだ(女性)***	そう思う	67.3	32.7
	そう思う以外	51.0	49.0
2-3 意識(人生全般)			
会社・仕事で自分は役に立っている(男性)	そう思う	63.3	36.7
	そうは思わない	57.4	42.6
会社・仕事で自分は役に立っている(女性)	そう思う	57.3	42.7
	そうは思わない	63.5	36.5
家庭・自宅で自分は役に立っている(男性)**	選択	69.2	30.8
	非選択	57.2	42.8
家庭・自宅で自分は役に立っている(女性)+	選択	64.2	35.8
	非選択	57.2	42.8
家庭より自分の生き方を優先したい(男性)	そう思う	60.3	39.7
	そうは思わない	61.0	39.0
家庭より自分の生き方を優先したい(女性)+	そう思う	51.3	48.7
	そうは思わない	63.2	36.8
現在の「ライフワーク」の有無+	あり	58.5	41.5
	なし	63.5	36.5
将来の経済的見通し*	楽観している	62.2	37.8
	悲観している	55.1	44.9
老後はできるだけ自分の子を頼りにしたくない	そう思う	58.3	41.7
	そうは思わない	62.9	37.1
家族と関係を深めたい**	選択	64.0	38.7
	非選択	53.4	46.6
3 家庭環境			
経済的ゆとりの有無	あり	62.7	37.3
	なし	58.9	41.1
子どもの人数	1人	64.2	35.8
	2人	61.8	38.2
	3人以上	58.6	41.4
子どもの年令***	幼稚園・保育園前	79.6	20.4
	幼稚園・保育園	71.2	28.8
	小学生	69.0	31.0
	中学生	54.8	45.2
	高校生	61.6	38.4
	短大・大学・大学院(専門高校生・予備校生含む)	52.2	47.8
	学校を卒業して働いていない(結婚した子ども含む)	74.2	25.8
学校を卒業して働いている(結婚した子ども含む)	56.3	43.7	
夫も家事を分担している(男性)	あてはまる	61.2	38.8
	あてはまらない	60.7	39.3
夫も家事を分担している(女性)*	あてはまる	67.4	32.6
	あてはまらない	58.6	41.4
配偶者とはよく会話をしている(男性)	あてはまる	60.1	39.9
	あてはまらない	66.7	33.3
配偶者とはよく会話をしている(女性)	あてはまる	63.6	36.4
	あてはまらない	58.3	41.7

+p<.1 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

からである。

案の定、「結婚したら妻が夫の姓を名乗るのは当然」

では、男性は有意ではないのに女性はきわめて高い有意差が出ており、男女の差が出ている。

「結婚したら女性は家庭に専念すべき」は、男性は10%水準で有意だが、女性は0.1%水準で有意と高い有意差を示している。「家庭」の仕事は家事のほかにも育児も入っているわけで、仮説2-2の鈴木による子離れのできない母親ほど「産育は女性の使命」という意識を持っているという説を補強するものといえる。

また、この結果からは、「結婚したら妻が夫の姓を名乗るのは当然」の結果とあいまって、性別役割分業観のつよい女性が非子離れ者である傾向を読みとることができる。

D. 意識(人生全般)における格差

ここで「子離れ」との関連で強い有意差を示しているのは「家庭・自宅で自分は役に立っている」という質問にたいする男性回答者の回答である(「男は仕事、女は家庭」という役割分担が人びとの意識のうえでも社会的現実においても存在することを鑑み、ここでも男女別にクロス分析を行った。「会社・仕事で自分は役に立っている」についても同様である)。1%水準で有意である。

家庭・自宅で役に立っていると思う父親ほど子離れができていない割合が高い。これも、先述の「頼られたいと思っている者は実際に頼られているというリアリティを持つ」というのと同様で、「頼られたいと思っている者は実際に家庭・自宅で役に立っている(=頼られている)」というリアリティを持つ」と解釈できると思われる。

仮説2-3-1の検討のために分析した「老後はできるだけ自分の子を頼りにしたくない」への回答は、有意差は出なかった。ただし、「そうは思わない(=頼りにしたい)」と思っている者は非子離れ者で62.9%、子離れ者で37.1%であり、「頼りたい」と「頼られたい」は両立可能な意識であることは確認できる。

仮説2-3-2の検討のために分析した「将来の経済的見通し」は、5%水準で有意であった。ただし、結果を見ると、将来を楽観している者ほど子離れができていないのであり、「将来の経済的見通しを悲観している者ほど子どもに執着する(=非子離れ者が多い)」という本稿の仮説は否定される。

E. 家庭環境における格差

このジャンルで有意なのは、「子どもの年齢」だけであった(0.1%水準で有意)。「幼い子どもを持つ親ほど非子離れ者である」という経験的知見から導きだした仮説3-1は採用される。

仮説3-2「夫の家事参加度が高い人ほど非子離れ者が多い」の検討のために分析した「夫も家事を分担している」は、女性においてのみ有意であった(5%水準で有意)。ただし、有意なのは、仮説を否定する方向で、である。夫も家事分担をしている、つまり、家事負担が比較的少ないと思われる者ほど子どもから離れられないのである。これをどう解釈するかは今後の課題としたい。

仮説3-3の「夫婦関係がよくない者ほど非子離れ者が多い」という仮説検討のために分析した「配偶者とはよく会話をしている」はまったく有意ではなかった(夫婦関係を問う質問なので、これも男女別に分析した)。夫婦間のコミュニケーションが上手くいっていないがために子どもに執着する母親のカリカチュアは、本稿の分析ではカリカチュア以上のものではないことが証明された。

4. 非子離れ者に影響力のある変数

A. もっとも影響力のある変数

3章で影響力ありと見た主な独立変数のうち、非子離れ者、子離れ者を分かつのにもっとも影響力があるのはどの変数なのだろうか。この章では、ロジスティック回帰分析によってそれを明らかにする。表3は分析に用いた変数、表4は分析の結果である。

表4によれば、全変数のうちプラスの影響力があるのは、「結婚したら女性は家庭に専念すべき」、子どもの教育の見通し、「進学にあたって塾は必要だと思う」である。マイナスの影響力があるのは世帯年収と本人年齢である。子離れに影響力がある上位3つの変数は「子どもに頼りにされている」と「家族との関係を深めたい」と性別である。

前節で本人年齢と非子離れ者との関連性は擬似的なもので、子どもの年齢が効いているためではないかとの疑問を提示しておいた。しかしながら、ロジスティック回帰分析が示すところでは、子どもの年齢は有意ではなく本人年齢では有意であるため、本人年齢と非子離れ者との関連性は決して擬似的なものではないといえる。意外なことだが、「子どもにはいつまでも頼ってほしいと思う」かどうかは、子どもの年齢よりも親の年齢のほうがより強く効いているのである(ただし、子どもの年齢の与える影響が皆無であるとはこの分析では断言できない)。

表3 ロジスティック回帰分析に用いた変数

従属変数		
	いつまでも子どもに頼られていたいダミー	そうは思わない=0 そう思う=1
独立変数		
本人属性	年齢	実年齢
	性別ダミー	男性=0 女性=1
	世帯年収	200万円未満=1 200万円～300万円未満=2 300万円～400万円未満=3 400万円～500万円未満=4 500万円～600万円未満=5 600万円～800万円未満=6 800万円～1,000万円未満=7 1,000万円～1,500万円未満=8 1,500万円～2,000万円未満=9 2,000万円以上=10
意識・親子関係	子どもの教育の見通し	悲観している=1 どちらかといえば悲観している=2 どちらともいえない=3 どちらかといえば楽観している=4 楽観している=5
	進学にあたって、塾は必要だと思う	悲観している=1 どちらかといえば悲観している=2 どちらともいえない=3 どちらかといえば楽観している=4 楽観している=5
	子どもに頼りにされている	あてはまらない=1 どちらかといえばあてはまる=2 どちらともいえない=3 どちらかといえばあてはまる=4 あてはまる=5
意識・性別役割分業	結婚したら、女性は家庭を守ることに専念するほうがよい	そうは思わない=1 どちらかといえばそうは思わない=2 どちらともいえない=3 どちらかといえばそう思う=4 そう思う=5
意識・人生全般	家庭・自宅で自分は役に立っているダミー	非選択=0 選択=1
	家族と関係を深めたいダミー	非選択=0 選択=1
家庭環境	子どもの人数	実数
	子どもの年齢	幼稚園・保育園前=1 幼稚園・保育園=2 小学生=3 中学生=4 高校生=5 大学生・短大生・大学院生(専門学校生・予備校生を含む)=6 学校を卒業して働いていない(結婚した子も含む)=7 学校を卒業して働いている(結婚した子も含む)=8

表4 子離れに影響のある変数のロジスティック回帰分析結果

独立変数	B	Exp (B)
本人属性		
年齢*	-.032	.968
性別ダミー+	.259	1.295
世帯年収**	-.111	.895
意識・親子関係		
子どもの教育の見通し*	.162	1.176
進学にあたって塾は必要だと思う**	.187	1.206
子どもに頼りにされている***	.290	1.336
意識・性別役割分業		
結婚したら女性は家庭に専念すべき***	.223	1.250
意識・人生全般		
家庭・自宅で自分は役に立っているダミー	.145	1.156
家族と関係を深めたいダミー+	.287	1.332
家庭環境		
子どもの人数	.021	1.021
子どもの年齢	.032	1.033
-2対数尤度	1205.511	
カイ2乗	86.637	
Cox & Snell R2乗	.086	
NagelkerkeR2乗	.116	

+p<.1 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

B. 各変数間の影響関係

表4を子細に検討してみると、 χ 二乗値の高い変数が揃っている本人属性、意識(親子関係)、意識(性別役割分業)は独立の影響を持っていると判断できるが、意識(人生全般)、家庭環境は間接的な影響力しか持っていないように見える。

変数間に関係ありとすれば、家庭環境の影響力は意識(親子関係)の間接的なバージョンにしかすぎず、意識(人生全般)の影響力は意識(性別役割分業)の間接的なバージョンにしかすぎないのではないかと確認すべく、それぞれの変数間でクロス分析を行い、 χ 二乗値を出した(対象は子のある非子離れ者のみ)。便宜的に、直接的影響力があると思われる意識(親子関係)からは、もっとも影響力のある「子どもに頼りにされている」のみを選択した。

すると結果は表5のようになり、家庭環境のうち子どもの人数と「子どもに頼りにされている」には強い関係が見られた。意識(人生全般)のうち「家族と関係を深めたい」と「結婚したら女性は家庭に専念すべき」との間に強い関係が見られた。しかし、子どもの年齢と「子どもに頼りにされている」、「家庭・自宅で自分は役に立っている」と「結婚したら女性は家庭に専念すべき」との間には関係は見られなかった。

したがって、変数間の影響力は次のようにまとめられる。家庭環境のうち子どもの人数は「子どもに頼りにされている」を経由した間接的な影響力しか持たない。また、意識(人生全般)のうち「家族と関係を深めたい」は「結婚したら女性は家庭に専念すべき」を経由した間接的な影響力しか持たない。

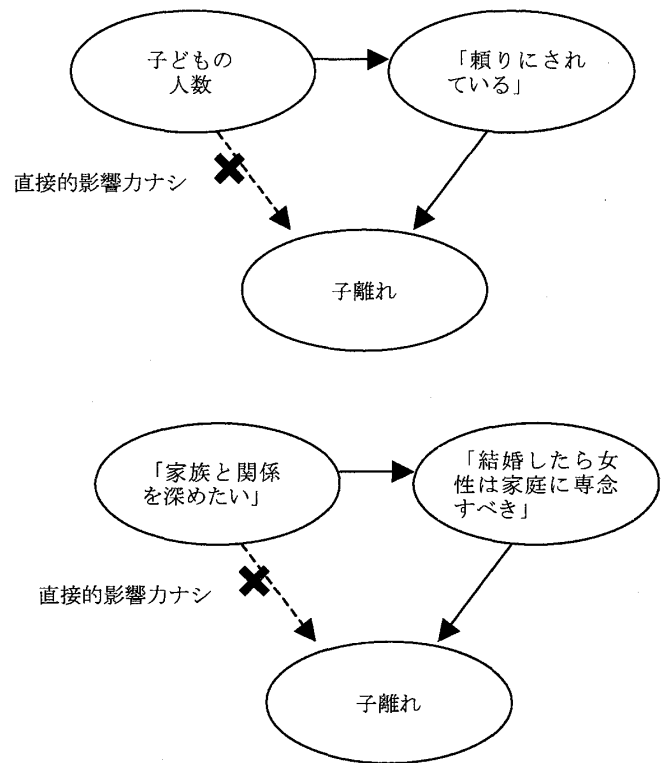
これらの発見は重要である。家庭環境というインフラが実は子離れ感情に直接の影響力を持っていないことを示唆しているからである。また、子離れ感情と直結しているように思える「家族と関係を深めたい」感情

表5 ロジスティック回帰分析で関連性があると思われる変数同士のクロス分析結果 (子のある「子どもにはいつまでも頼られたい」回答者のみ。数値は χ 二乗値)

間接	直接	子どもに頼りにされている
子どもの人数*		.031
子どもの年齢		.222
間接	直接	結婚したら女性は家庭に専念すべき
家庭・自宅で自分は役に立っている		.345
家族と関係を深めたい*		.010

+p<.1 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

図3 子どもの人数/「家族と関係を深めたい」の間接的影響力



が実は直結していないことも意味しているからだ。

5. まとめ

以上の結果をまとめておく。

本人属性のうち、クロス分析における χ 二乗検定で

有意だったのは、年齢と世帯年収であった。後者では世帯年収が低いほうが子離れがしにくい結果を示しており、パラサイト・シングル論でさかんに言われていた「子どもをパラサイトさせる親は所得が高い」を否定するものとなっている。もっとも、心情において子どもから離れられないことと、心情はともかく物理的に子どもをパラサイトさせてしまうこととの間には距離がある。本稿の結果は、パラサイト・シングル仮説の否定というよりは、心の子離れと物質的な子離れとは異なるものであることの示唆として受け止めたい。

親子関係にまつわる意識のうち、クロス分析で有意差を示したのは、「進学にあたって塾は必要だと思う」「生活を切り詰めてでも子どもには教育を受けさせたい」であった。なにを置いても教育を優先する熱心な親の像がうかびあがる。「子どもに頼りにされている」も有意差があったことから、「頼りにされたい」と願う者は、現実にも「頼りにされている」と認識することが読みとれる。

また、「子どもの教育の見通し」の良し悪しが、クロス分析で有意、かつロジスティック回帰分析でも有意にプラスの影響を与えていたことから、将来の見通しの良い子どもには「いつまでも頼ってほしい」と執着し、将来の見通しの悪い子どもには「いつまでも頼ってほしくない」とやっかい払いをする、ある意味で露骨な親の像が浮かび上がる。親子関係にも「業績主義」が持ち込まれているといったところだろうか。もっとも、確実なことを言うには、子どもの客観的な成績との関連で調査することが必要となる。

性別役割分業にまつわる意識については、クロス分析でもロジスティック回帰分析でも、「保守的な考えを持つ者ほど子離れができない」という仮説が証明された。クロス分析では、とりわけその傾向が女性において強いことが明らかになった。女性にとって「子育て」は、まだまだ重要なアイデンティティの預け所であり、そう簡単に手ばなせるものではないということが言えるだろう。

人生全般における意識については、「家庭・自宅で自分は役に立っている」と思う者ほど子離れができていないことが見てとれた。また、「頼ってほしい」と願う心情と「将来子どもに頼りたい」と願う心情とは両立可能なことも明らかになった。自分の将来を悲観している者ほど子離れができていないという結果は、「将来が心配だからこそ、子どもに頼りたい(子離れができていない)親が多いのではないか」という予想を裏切るものであった。ただし、これは、自分の将来が心配だ

からこそ、子どもというお荷物を早々にやっかい払いしたい心情とも読めるのであり、前述の「親子関係における業績主義」仮説を補強するものともいえる。いずれにせよ、今後探求すべき課題である。

家庭環境における要因では、クロス分析では「子どもの年齢」だけが有意であった。しかし、ロジスティック回帰分析では「子どもの年齢」より「親の年齢」のほうに強い影響力を見ることができた。「夫婦関係が良くない者ほど子どもに執着する」という世間に流布するイメージは、本稿の分析では確認できなかった。

以上の結果を総合すれば、第一の課題である子離れのできない親の像は次のように描けるだろう。

- ・所得は低く、年齢は若く
- ・教育熱心かつ子どもの出来がよく
- ・性別役割分業にたいして保守的な考えを持ち
- ・子どもの年齢が若い

第二の課題である変数間関係であるが、もっとも影響力が強い上位3つの変数は「子どもに頼りにされている」(意識・親子関係)と「家族との関係を深めたい」(意識・人生全般)と性別(本人属性)である。本人属性、意識(親子関係)、意識(性別役割分業)には独立の影響力があるが、意識(人生全般)のうちの「家族と関係を深めたい」と家庭環境の子どもの人数には間接的な影響力しかなかった。

今後は、子離れに特化した質問紙を用いての、心の子離れと物理的な子離れを分けたいという世帯年収との関連性を探ること、親子関係における「業績主義」を確認することなどが課題となるだろう。また、家庭環境が子離れ感情に間接的な影響力しかないことを再度確認するための作業も必要となる。

(指導教官 廣田照幸助教授)

謝辞：本稿の執筆にあたって、佐藤香先生(東京大学)、山本功先生(淑徳大学)に多大なアドバイスをいただいた。

注

- 1) ライフスパンと子の教育期間の延長を反映し、家族社会学の分野では、「中期親子関係」「脱青年期」といった新しいライフステージ区分にもとづいた成人前後の親子関係研究が、メイン・テーマとなりつつある(正岡1993など)。
- 2) 宮本らの標本は東京都府中市と長野県松本市に住む50歳台の親約530名(と20歳台の未婚者)、鈴木は女子大学生とその母親それぞれ251名である。

参考文献

- 春日井典子 1997『ライフコースと親子関係』行路社
- 鎌田稜 2002「子離れできない親」『児童心理』56巻16号
- 鈴木英子 2001「子離れ認知と産育観に関する試論——女子大学生を持つ母親を対象として」『人間研究』37巻
- 正岡寛司 1993「ライフコースにおける親子関係の発達的变化」『家族社会学の展開』培風館
- 宮本みち子・井上真珠・山田昌弘 1997『未婚化社会の親子関係』有斐閣